

センサー

2001年 1月号 第34号

東京温度検出端工業会 会報

年頭所感とご挨拶

2001年1月

会長 荻野 紘 一

会員の皆様、明けましておめでとうございます。新世紀元年となる輝かしい2001年をお迎えの事とお慶び申し上げます。また、平素は当会活動にご理解とご協力をいただき、厚く御礼申し上げます。

21世紀を迎えたと言いましても、一昨年の末には所謂コンピュータの2000年問題で大変でしたし、諸外国などでは2000年で21世紀に入ったと宣言したり、お祝いをしたりして、いわば前倒しで騒がれた為、比較的盛上りムードに欠けた様に思えます。

20世紀最後の年となった昨年は、景気回復への一進一退状態から抜け出せないまま終わりました。特に、例年になく不祥事として、6月に起きた雪印乳業による食中毒事件は、社内のずさんな製造管理の実態が露呈し、今更ながら製造管理、品質管理の大切さを教えてくれましたし、三菱自動車のリコール隠しが発覚し信頼を失墜しました。

また、三洋電機の子会社が製造した太陽光発電システムの一部不正表示販売、などの認識の甘さによる不祥事によって、企業経営の根幹を揺るがす事にもなるとの認識をさせられました。一方、企業間の合併、統合の決断が相次ぎました。例えば、第一勧銀、富士、日本興業の3行による統合で、みずほフィナンシャルグループ、の発足、などがありました。また、千代田、協栄生命や、大手百貨店のそごうなどの大型破綻など、超低金利の影響や、バブル期の過大投資のツケによるものなどが特に目立ちました。

循環型社会の構築を目指した法制度などの環境面での体制整備が大きく進み、「循環基本法」をはじめとする関連6法の成立・改正、また昨4月から本格施行した「容器包装リサイクル法」と本年4月から施行される「家電リサイクル法」を併せ、20世紀型経済価値観からの転換を目指すことになりました。

こうした中でやはり特筆すべきは、昨11月に成立した「IT基本法」でしょう。本年1月6日に中央省庁の新体制がスタートすると同時に施行され、ITを武器に日本型IT社会を目指すことになりました。この進展するIT革命は、半導体業界の所謂IT特需に沸き、大手5社の2000年度の設備投資額は、1兆円に迫る見通しのようです。私達の業界もその恩恵を受けている会員会社も多いのではないかと思います。

また、急速に進展するデジタル化は、BSデジタル放送時代への第一歩を踏み出しましたし、デジカメの出荷台数は前年の約2倍となり、金額ベースでは銀塩カメラを上回った年になりました。

自然災害では、三宅島の火山噴火、東海地方の豪雨など人々の生活に多大な被害を出し、自然の恐ろしさと共に常日頃の危機管理の重要性を痛感させられました。

一方、シドニーオリンピックのさわやかな感動、ON対決に沸いたプロ野球など、明るい話題も多い1年でありました。

総じて日本経済は、肥大化する財政赤字の中で、マイナス成長を避けようとし、有効活用できない政府予算等々国家的課題が山積していると言えましょう。IT革命という字句のみに踊らされることなく、そのシステムをどのようにして実行していくか、また、循環型社会システムをどのようにして構築していくかが今後問われることになりましょう。

そして、私達業界もその社会的使命をこの激変する社会システムの中で果たしていくことが求められるでしょう。

21世紀は「知識」の時代への転換が求められております。私達企業が、或いは個人が蓄積し、活用する知識からモノが生み出される。一人一人が外からは見えない生産手段を持っている、というドラッカーの言葉を噛み締めたいと思っております。

ところで、皆様ご存知のこととは思いますが、「平成の伊能忠敬ニッポンを歩こう21世紀への100万人ウオーク」(伊能ウオーク)と伊能忠敬について少し触れさせていたいただきたいと思えます。

1999年1月25日東京を出発し、約2年かけて1万キロ余の日本列島を一筆書きで辿りながら、2001年1月1日東京にゴールするという壮大な催しであります。

去年は忠敬が1800年に測量を開始してちょうど200年であり、高齢化社会を迎える20世紀末に中高年が中心になり、忠敬のパワーにあやかりつつ、元気に21世紀を迎えようと言う事で「歩く」という人間が人間たる由縁の動作を繰り返すことによって、ともすれば上っ調子になりがちな私達の体質そのものを変える契機になればという期待が込められました。忠敬は50歳で天文学や測量術を学び、55歳で全国を測量する旅をスタートし、亡くなる2年前の72歳まで17年間続き、正確さでは当時の世界最高水準の地図を作りましたが、その間歩いた距離は実に約3万5千キロです。この偉業が平均寿命40歳台であった江戸後期に行われたことは現代から見ると、「人生を2度生

きた人」として、一際光彩を放っています。

忠敬の残した業績は沢山ありますが、洪水、火山噴火の被害、飢饉などに対する私財の投入による社会への還元、技術的には、北極星を利用した緯度1度の地面の距離計測などです。

ちなみにその距離は28里2分(110.75キロ)で正確なものでした。所謂「伊能図」は明治の中頃まで正式な日本地図として使われたのです。

この様に考えて来ますと、小さな一歩一歩は積もり積もって、すごい大きな仕事になると言い事を彼から学ぶことが出来ます。

「四千万歩の男」の著者、井上ひさし氏によれば、「高貴さにまで高められた遇直な精神」に裏付けられた「寓直な行動」であると言っていますが、この事こそ今私達に求められている事ではないでしょうか。

最後に、皆様方にとりましてより良き年となりますよう、祈念致しまして年頭のご挨拶とさせていただきます。

以上

会の動き

- ◎平成12年1月21日 第39回「技術懇談会」
ISO9000取得よもやま話、林電工(株) 池上氏。
タイ国立計量研究所滞在記、都立産業技術研究所 尾出氏。
- ◎平成12年2月4日 新春懇親会。
巣鴨「田村」において。参加者 33名。
会報「センサー」33号発行。
理事会。
総会の日程について。
- ◎平成12年4月27日 理事会。
総会に提案する議題について審議、承認。
- ◎平成12年5月26日 総会。
平成11年度事業報告、会計報告及び12年度事業計画を審議、承認。
理事の選出方法について審議の結果「会員の投票によって7社を選出し、3社は50音順の名簿の順番により選出する」ことに決定。
- ◎平成12年6月10日 第41回「けんたん会」
埼玉ゴルフクラブにおいて。参加者 11名。
優勝者 萩野絃一氏。グロス 93、ネット 79。参加者の平均スコア 104.9。
- ◎平成12年6月30日 第40回「技術懇談会」 参加者 30名。
貴金属熱電対の最近の研究動向について。
玉川大学 後藤先生。
表面温度計について。
安立計器(株) 小林氏。
- ◎平成12年9月7日 理事会。
年度内の行事、及び日程について審議。
日機装ワイエスアイ(株)の入会、ケイエフインターナショナル(株)の退会を承認。
- ◎平成12年11月17日 第42回「けんたん会」
取手国際ゴルフクラブにおいて。参加者 8名。
優勝者 小澤彰二氏。グロス 108、ネット 74。
参加者の平均スコア 103.4。

- ◎平成12年11月28日 工場見学会。参加者 30名。
新日本製鉄㈱ 君津製鉄所。
東京電力㈱ 新エネルギーパーク。
- ◎平成12年12月6日 第2期「温度計実務講座」第1回。
講師 横河総研㈱ 小川実吉氏。参加者 32名。
- ◎平成12年12月7日 理事会。
定款の作り直し、及び「新春懇親会」について。

平成12年11月28日 工場見学報告会

林電工株式会社 鳥塚 拓矢

東京温度検出端工業会の工場見学会は今回で3回目になりますが、毎回様々な業界の工場を見学させていただき大変勉強させていただいております。

まず、午前は富津火力発電所のTEPCO新エネルギーパークを見学しました。ここでは、現在、電力の半分以上を占めている化石燃料、原子力に変わる新エネルギーのさらなる実用化を目指していました。その新エネルギーとして自然を生かした太陽光、風力や蓄電率の高い電池、夜間の割安な電力を利用した氷蓄熱などがありました。電力の変換効率が化石燃料などに比べてまだ低いようですが、資源にも限りがあるのでこのような環境に悪影響を及ぼさないものを21世紀は実用化していかなくてはならないと考えさせられました。また、小学生の社会科見学などにも多く利用されているせいか、わかりやすくおもしろいテーマパークでした。

午後は、新日本製鉄君津工場でした。熱延、転炉の工程を見学させていただきました。熱延の工程では鉄鋼を延ばしていく途中に水をかける時の音や、転炉での燃焼物を炉に入れ替える際の炎が大変迫力がありました。ハイテクコンピューターで管理しているせいか、効率化により工場内では作業員の方の姿はほとんど見られませんでした。また、ほこりが出るため道路に常に水をまいたり、植物などを植えて環境にも考慮されているようでした。肌寒い気温にも関わらず、輻射熱はかなり強いので構内は暖かく冬は過ごしやすいそうですが、夏場の現場作業は非常に大変とのことでした。新日鉄の工場の中でも一番大きいだけあって、歩いている人はあまり見かけず車や自転車で移動される方が目につきました。駅の近くに社宅、体育館、野球場、グラウンドなどがあり君津市は絵に描いたような企業城下町で、地域と企業が一緒になって発展していったのが感じられました。ただ、全盛期に比べると従業員数がかなり減っていて社宅の空室も多く、野球部、バレー部なども地元の企業と共同出資していかないとやっていけないとのことで、企業が長期間存続することの困難さを感じました。

今回の工場見学で、これからの工場経営は効率化の追求、資源の有効利用、環境問題をさらに重要視していかなくてはならないことを再確認しました。また、それによりハイテクコンピューターなどの機械によって人間性が欠けていく矛盾も考えさせられました。

以上、乱文ですがご報告させていただきます。

末筆ながら幹事様、工場関係の皆様がこの場をお借りして、お礼申し上げます。

編集後記

21世紀の幕明けの年となりましたが、何となく気の重いスタートになったような気がします。1000年紀の変わり目の年のはずですが、どうも盛り上がり欠けているようです。むしろ去年の方が、いわゆるコンピューターの2000年問題があったせいも、時代の変わり目が意識され、イベントも多かったように思います。

政府の発表では、景気はゆるやかに上昇しているとのことですが、実感のないまま最近では下降し始めているようです。

不可解な事件が頻発し、政治の腐敗も相変わらずです。いったい21世紀はどうなってゆくのだろう、と暗い気持ちが先に立ちます。しかし、見方を変えれば、スタート台は低い方がいい、ということがいえるかもしれません。これ以上悪くなることはないのかもしれませんが。

新世紀の最初の年、気を取り直し元気を出して進みましょう。

平成13年1月発行 No.34

発行所 東京温度検出端工業会

事務局

東京都文京区本駒込6-5-5 (林電工株式会社)

電話 3945-3151